The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	咸陽宮の威容 ： 『咸陽宮』絵巻と説話の世界
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	語文. 1993, 60, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68853
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

咸陽宮の威容

―『咸陽宮』絵巻と説話の世界―

伊井春樹

一　咸陽宮の位置

現存する『咸陽宮』絵巻の諸本は大きく二系統に分れるものの、内容において相互に緊密な関連性を持ちながら、また各伝本間で独自な説話を内包し、複雑な物語の展開をすることなどはすでに述べたところである。[1] そういった中にあって、穂久邇文庫本は絵草子屋城殿の製作であるだけに、近世初期における平均的な享受の実態を示してもいるはずで、その物語の方法を知ることは成立の背景や基盤、さらには他の本文との影響関係の解明にも通じるに違いない。

まず、穂久邇本の冒頭は、

そも〳〵かん陽宮と申は、秦の始皇ていのみやこ也。内裏のたかさは三里有、城のめぐりは一万八千三百八十四里とぞ聞えし。[2]

と、咸陽宮の概略を述べ、以下戦国時代と七大国の争いなど、歴史的な背景を示しながら秦の天下統一へと話題を導いていく。ここでは咸陽宮の概略が示されるだけだが、さらに具体的な規模が明らかにされるのは、刺客の荆軻・秦舞陽が秦国入りして目にした威容として次のように描写される。

宮城のめぐり一万八千よ里ときけば、まことにはるばるのみちのほど也。そのうちにたかさ三里の山をつき、そのうへに御殿をたてられたれば、雲より空にそびえつゝ、天とひとしう見えにけり。だいりのめぐりには、たかさ三十丈、めぐり九千里のあかゞねのついぢをつかれたり。つゐぢのうらにまどをひらけり。これをがんもんとがうす。さればしよく山といふたかき山、ゐすいといふ大河も大りのうちにぞ侍ける。しくはうていのおはします御殿は、あばうでんと申は、東西五百けん、なんぼくは五十丈、あかがねのはしら、こがねのたかきしゆぎよくをちりばめ、七ほうをかざりたれば、心もことばもをよばざるけしきなり。

そうじてだいりへのぼるみち、はるばるのほとりなり。そのあひだ川にははしをわたし、山にはかけはしをつくりかけ、一町に一所づゝらうかくをつくられ、ゑいし官人、左右にしこうして日夜をわかつてしゆごをなす。

この規模をまとめると、咸陽の周囲は一万八千余里、その中に高

さ三里の山を築き、さらにその上に建てた御殿（内裏）は雲よりも空にそびえるほどであった。内裏の巡りには高さ三十丈、周囲九千里の「あかがね」（銅）の築地をもうけたのだが、他の説話と同じなのであろう、雁の飛行を妨げないようにと、雁門という窓を開けたとする。「しよく山」（蜀山カ）や渭水も内裏の内にあるというのだから、その広大さが知られるであろう。始皇帝の住むのは阿房殿で、これは東西五百間、南北五十丈、銅の柱で支えられるいう構造となっており、この建物を含む内裏への道は容易ではなく、途中の川には橋を渡し、山にはかけ橋が架けられ、一町に一所ずつの樓閣が置かれて衛士や官人が日夜守護していたという。この俯瞰図はなかなか想念に浮ばないのだが、歴史的な事実かどうかはともかくとして、咸陽の地の周囲が一万八千余里、さらに九千里の築地に囲まれて高さ三里の山が築かれ、頂上に内裏（咸陽城）が聳えるといった構造のようで、その建物群の一つに阿房殿も存在したというのであろう。

献公即位の二年に櫟陽城が築かれ、さらに子の孝公十二年（前三五〇年）には「作為咸陽、築冀闕、秦徒都之」（『史記』秦本紀）と、新しい秦の都として咸陽の地が選ばれる。咸陽を本格的な城郭都市としたのは始皇帝三十八歳の二十六年（前二二一年）、それまで対立していた五カ国をすべて滅ぼし、ここにはじめての強大な天下統一による国家を出現させて後のことであった。始皇帝と称するようになったのもこの年からで、以後没する五十歳までの十数年、古代国家の建設にもっとも邁進した時代であったといえよう。『史記』（秦始皇本紀）によって概略示すと、[3] 国内を三十六郡とし、世の富家十二万戸を咸陽に移すとともに、滅ぼした国々の宮室を模倣した建物を再建し、それまでの渭水北の咸陽宮から渭南の信宮（極廟）へと比重を移す都市改造の計画を実行する。三十五年、狭隘となった咸陽から本格的に渭南の地に朝宮（正殿）の建設に着手、その前殿として阿房の地に宮殿が建造されるのだが、それは東西五百歩、南北五十丈、上には一万人が座れる広さ、床下は五丈の旗が立てられるほどの高さがあった。各建物は廊下で通じ、その南に位置する南山には回廊伝いで至り、阿房宮からは渭水を渡って咸陽の宮殿とも連絡ができるというありさまで、罪人十七万人が二手に分れ、一方は阿房宮を、残りは酈山の造営に当たらせたいう。阿房宮は、現代の寸法にすると東西約七百メートル、南北は百二十メートル[4]もあったという壮大さで、ほかに関中の宮殿は三百を数えたとも記す。

これらの史実と絵巻の本文とを比較して違いを検証するつもりなどないが、おおよその建物の配置や規模などが明らかになると、物語で描こうとした宮殿の方法を知ることにもつながってくるはずである。他の説話資料との関連はひとまずおいて、『咸陽宮』絵巻の諸本での違いをみると、大阪青山短期大学本では、後々の要害のためにと、広さ「三百めぐり、九千里」の鉄（くろがね）の築地を設け、雁の飛行のために雁門と称する窓を開けたことを述べ、「およそかんやうきうの高さ三里を九ぢうにつきあげ、めぐり一万八千三百八十余里にこしらへたり。その中に四十六のぜんでん、三十六のこうきう、雲をつらぬき、長生不老のぜんもん、万戸にじのごとくにとをり、きりん、ほうわうあひむかひ、玉のうつばり、こがねのこじり、日りん月光かがやきわたれば、ろうかくたがいにえいてつし云々」と、穂久邇本と重なりながらも、また異なった咸陽宮の様相を伝えようとする。周囲の長さはほぼ一致するとはいえ、高さは

三里を九重にしたとするのは、具体的にどのようにイメージ化すればよいのか明らかでないものの、このまま単純に掛け算すると二十七里にもなってしまうが、ともかくその頂上には四十六の前殿、三十六の後宮が雲を貫くように建ち並び、長生殿や不老門などがあるとするなど、そのはなやかさぶりが強調される。さらに、

中にも、ぜんでんのあばうきうこそおびただしけれ。此でんのひろきこと、とうざい五百ほ、なんぼくへ三百ほ、たかさ三十丈なり。大床の下には五ちやうのはたほこをたてならべ、庭にはきんぎんのいさご、るりのいさご、しんじゅのいさご、をのをの十まんごくをまきちらしたり。

と、『史記』での阿房宮が東西五百里、南北五十丈とするのと、「ほ」（歩）とする長さの単位とともにすこし異なっているようだが、ここでは穂久邇本には見えない高さ三十丈もあるという床下には旗や鉾を立て並べ、庭には金銀や瑠璃、真珠の砂を十万石もまき散らしたとする描写が加わる。

専修寺本[5]も引用しておくと、

しくはうていの御時に、天下を三十六ぐんとさだめ、かんやうきうをおびただしくひろげて、たかさ三里の山をつきあげ、そのうへに大りをつくりて、めぐり九千里にはあかがねのついぢをつき、がんもんをひらかれたり。しくはうていのおはします御てんはあばう宮と申て、東西五百けん、なんぼく五町、たかさ二十ぢやうなれば、やへたつ雲のうへなるべし。それよりきんもんまでは三百里あり。その間にいすいといふ川ながれたり。三百里の間にはふだうと申て、たかさ十ぢやうのらうかをつくりつづけ、とうざいにす百のくうでんをたてならべたり。そのきれいしやうごんは、いづれもをろそかならず、玉のいらか、こがねのうつばり、しろがねをもつてたる木とし、あかがねをもつてはしらとす。にはにはしんじゅのいさごをまき、戸ぼそは七ほうをちりばめたり。

と、前半の内裏の様相はほぼ三本共通するものの、三里の山を築きあげたとか、九千里の「あかがね」の築地というのは穂久邇本と表現が重なる。阿房宮から禁門までは三百里、途中に渭水という川が流れており、両者の間は高さ十丈の廊閣で結び、百の空殿を建て並べたというのは、『史記』の記述や、穂久邇本との関連も連想させる。また、阿房宮の描写なのであろうが、「玉の甍、黄金のうつばり、白銀をもつて垂木とし、あかがねをもつて柱とす……戸ぼそは七宝をちりばめたり」は、穂久邇本の「あかがねの柱、黄金の高きり、珠玉をちりばめ、七宝をかざりたれば」に近く、間にある「庭には真珠のいさごを撒き」は、青山短大本と一致する。

このように、咸陽宮の規模について三本を比べただけでもそれぞれ独自の描写の世界を持ちながら複雑に絡まっており、にわかに伝本間の関係を判断するのは困難な状況にあるが、すくなくともここでは穂久邇本と青山短大本は対立し、その中間に位置するのが専修寺本であるとの図式は導き出せるであろう。これが説話の世界とどのようにかかわるのか、別の資料によって物語の位置づけをすこし探ってみたい。

二　咸陽宮譚の広がり

咸陽宮の壮麗さは『史記』によって日本の文学の世界にもたらさ

れ、さまざまな分野に影響を及ぼしながら表現に一つのパターンを生むとともに、また独自のイメージとしても受容されていったようである。謡曲の『咸陽宮』では、

抑もこの咸陽宮と申すは、都のまはり一万八千三百余里。内裏は地より三里高く。雲を凌ぎて築きあげて。鉄の築地四十里。又は高さも百余丈。雲路を渡る雁がねも。雁門なくては過ぎがたし。内に三十六宮あり。真珠の砂、瑠璃の砂。黄金の砂を地には敷き。長生不老の日月まで。甍を並べて夥し。帝の御殿は阿房宮。銅の柱三十六丈。東西九町、南北五町、五丈の旗矛、龍車の雲居、さながら天に飄り、登れば玉の階の云々。

と、数値にはかなり異なりを見せるものの、基本的な叙述方法はすでに示した物語の三本と変るところがない。というよりも、むしろこのような中世における『史記』の解釈による咸陽宮の理解が広く伝承され、そのさまざまな描写のヴァリエーションがそれぞれの作品に吸収されていったのである。咸陽宮とはなくても、中世の物語には「地よりは三里高く、八十ちやうのくろがねの築地、くろがねの網をはり、くろがねの門をたてたりけり」（『御曹子島渡』）、「次第々に砂の色を見れば、みな金の如く也。銀の門をたて、金の門をたて、見れば金の砂、一町ばかり敷き満てり」（『梵天国』）などと、その荘厳な姿が転用されもする。

咸陽宮に関してまとまった形で記述された早い時期の資料としては『平家物語』があるようで、延慶本（大東急記念文庫）の本文を示すと、

都ノ周一万八千三百八十里ニツモレリ。内裏ヲバ、地ヨリ三里タカクツキ上テ、其上ニ立タリ。長生殿、不老門アリ。金ヲ以テ日ヲ作り、銀ヲ以テ月を造レリ。真珠ノ砂、瑠璃ノ砂、金ノ砂ヲ敷満テリ。四方ニハ高サ四十里ニ鉄ノ築地ヲツキ、殿ノ上ニモ同ク鉄ノ網ヲゾ張タリケル。是ハ冥途ノ使ヲ入レジトナリ。秋ハタノムノ雁ノ春ハ越路ニ帰ルモ、飛行自在ノ障リ有トテ、築地ニハ雁門トテ、鉄ノ門ヲ開ケテゾ通シケル。其ノ中カニ阿房殿トテ、始皇ノ、ツネハ行幸成テ、政道行ハセ給フ殿アリ。高サハ三十六丈、東西ハ九丁、南北ヘ九丁、大床ノ下タハ五丈ノ幢コヲ立タルガ、猶及バヌ程ナリ。

上ハ瑠璃ノ瓦ヲ以テ葺キ、下タハ金銀ヲ螫ケリ。

と、これまで記したいくつかの咸陽宮譚と共通しながら、言辞としてはより謡曲との重なりを見せる。ただ、このように諸説を引用するだけでは相互の比較が困難なので、延慶本を中心としながらこれまでの説話に盛られた基本的な要素をパターン化すると、およそ次のようになるであろう。

①都の周囲　一万八千三百八十里
②内裏の高さ　地より三里築き上げる
③宮殿の数　前殿四十六、後殿三十六
④長生殿と不老門の描写
⑤四方の鉄の築地　高さ四十里
⑥雁門
⑦阿房宮の描写
⑧阿房宮の位置

このうち、個々の作品によって、具体的な数値とか宮殿の描写や位置づけなどに違いが見られはするが、その詳細な差異は後に検討することにして、まずは大まかな一覧表を作成してみる（○は一致、

△は不一致、空欄は存在しないことを示す。なお、延慶本に③と⑧の項目を他の説話から付加した)。

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
朗詠永済注	○		△	○				
覚一本平家物語	○	○		○	○	○	○	
三国伝記(平仮名本)	○	△	○	○	○	○	○	
三国伝記(版本)	△	△	○					
源平盛衰記	○				△	○		
太平記	△	△	○					
咸陽宮(謡曲)	○	○	△	○	○			
穂久邇本	○	○			△	○	○	
大阪青山短期大学本	○	△	○	○	△	○	△	
専修寺本		○			△	○	△	○
二松学舎本	△	△	○	○	○	○	△	○

延慶本を基準にして諸説を見るとそれぞれの関連の距離が知られるが、すでに述べたように『史記』では内容や数値はともかくとして、記録として語られるのは⑦⑧にすぎなく、③の宮殿の数にいたっては、「関中計宮三百、関外四百余」(始皇帝本紀)とするのだから、これは比較することなど論外であろう。この表で見ると、延慶本とは三国伝記(平仮名本)・謡曲・二松学舎本とが近い存在のようで、朗詠注・源平盛衰記、それに穂久邇本・専修寺本とはそれほど緊密な関係にあるとは思われない。

まず、①の「都ノ周一万八千三百八十里」について、近年の発掘調査による長安城の周囲が漢の六十里強(二万五千メートル)とする[6]のを知るにつけ、「里」の単位が異なるにしてもあまりにも膨大すぎる都の周囲だが、これは本来『和漢朗詠集註抄』(旧黒木本)に「咸陽宮、秦始皇、築長城。廻一万八千三百八十里」と、始皇帝が築いた長城の長さと理解していたことによるようである[7]。もっとも、今日の調査によると全長六千キロ、中国の里程では一万二千華里とかなり近い数値であるにしても、この一万八千三百八十里がどのような典拠によっているのかは知らない。日本での説の始まりが長城の総延長だったとすると、その後はほとんど咸陽城の周囲とすっかり誤解してしまっていたことになる。穂久邇本とは共通するとしたものの、表現としては「一万八千よ里」としており、他の資料がいずれも「一万八千三百八里」と正確に記すのとはやや違いがあると言えるかも知れない。

都の周囲の記述がありながら、延慶本と異なるとした二松学舎本では、「めぐり三百七十里」とあり、まず本質的に依拠した資料の違いを思わせるが、これは『三国伝記』(版本)の「廻リ三百七十里」、『太平記』の「其中ニ回三百七十里」とあるのを見ると、たんなる過ちではなく、このような確かな伝承も存在していたと知られる。これと緊密に関係しているのは②の内裏の高さで、多くは三里とするのに対して、この三本では「高さ三里の山をつきて、是を九重にたたみあげ」(二松学舎本)、「高サ三里ノ山ヲ九重ニ築上」(版本三国伝記)、「高サ三里ノ山ヲ九重ニ築上テ」(太平記)と、共通した独自の認識を示す。都の周囲と内裏の高さはセットのように結びついているのだが、ところがすでに引用した青山短大本では「一万八千三百八十余里」の説をとりながらも、一方では「高さ三里を

九ぢうにつきあげ」と異説をも継承し、いわば折衷案の立場にある。それでは青山短大本が、両系統本からそれぞれの説を取り込んだのかというと、そうでもないようで、『三国伝記』（平仮名本）にも「かんようきうと申は、城のめぐり一万八千三百八十よ里也。そのうちに高さ三里の山を九ぢうにつきて、そのうへに内裏をつくらる」と、すでに同説が存在する。この①②を取り上げただけでも、『咸陽宮』絵巻がいかに複雑な成立であるかが知られるようで、一本からの親子とか兄弟関係による本文の成立ではなく、基本的な物語にそれぞれ外部から説話を吸収することによって増益していった体裁だったようである。

これらの諸説でもっとも異同の多いのは④の長生殿と不老門の記述で、表でも分るように資料によって空欄が目立つなど出入りがあり、詳細に描写される一方では穂久邇本と専修寺本では三里の高さの上は御殿が存在すると指摘するにとどまる。延慶本によると山頂には長生殿と不老門があり、建物の内部に仕掛けたというのであろうか、金の太陽と銀の月を作り、地には真珠、瑠璃、金の砂が敷き詰められていたという。この二つの建物は、すでに指摘されるように『和漢朗詠集』（巻下、祝、保胤）の「長生殿裏春秋富不老門前日月遅」によっているようで、国会本朗詠注には「北有雁門。南有不老門。中有長生殿」と、北の雁門と対になって南に不老門があり、それにはさまれるように長生殿が位置する構図と考えられていた。さらに、旧黒木本和漢朗詠註抄によると、「金沙十万石、瑠璃沙十万斛、金三百万斤、銀七百万斤、真珠沙百万石、玉瓦四百万枚、以之荘之。紫震殿、造金師子、仁寿殿、造銀虎、置之」と、殿舎は金や瑠璃の砂が敷かれ、金銀などでの荘厳化がはかられ、紫震殿には金の獅子、仁寿殿には銀の虎の置物があったとも記す。後者の典拠は明らかではないが、前者については国会本朗詠注にも「金砂コ十万石、瑠璃砂十万石、真珠ノ砂百万石庭敷」とし、永済注にも「金ノ砂十万斛、瑠璃ノ砂コ十万斛、真珠ノ砂コ百石ヲシケリ」とあるなど、かなり広く受容されていた説のようである。ただ、咸陽城にはこのような建物は存在しなく、唐代の御殿などの名称を用いて壮大さを意図してのことではあった。

青山短大本の長生殿・不老門の描写はすでに引用しているので、もう一本の二松学舎大本の本文を示すと、

前殿のむねかず四十六あり、後宮のむねかず三十六あり。千門万戸とをりひらき、ろうよりろうにいたり、かくよりかくにつたふて、たんちゆう房すでに花をかざり、玉をちりばめたり。長生殿のまへにはしやくしんじゆのいさごをしき、白るりの玉をならべ、不老門のうちにはこがねをもつて日りんをつくり、しろがねをもつて月りんをつくりて空の間にかけられ云々、

と、両本同じような表現の構造を持ちながら、またかなり異なった様相をも示す。ここでは意味の不明な箇所もありはするが、千門万戸が楼から楼へ、閣から閣へと通じており、長生殿の前には真珠の砂と白瑠璃の玉を敷き並べ、不老門の内には金の日輪と銀の月輪が作られて空に浮んでいるのだという。青山短大本では、万戸が虹のように通じ、麒麟と鳳凰とが向かいあい、玉の梁や黄金の鐍、それに日輪月光が輝きわたり、楼閣は映徹しあうというはなやかさで、「瑠璃のいさご、銀の床、花柳影を浮かべて、階闥品々に分れたり」と描写される。ただ、青山短大本のこの部分は、『太平記』（巻二十六）の「千門万戸トヲリ開キ、麒麟列鳳凰相対ヘリ。虹ノ梁金の鐍、

日月光ヲ放テ樓閣互ニ映徹シ、玉ノ砂・銀ノ床、花柳影ヲ浮テ、階闥品々ニ分レタリ」とするのとかなり密接な関連があったにちがいない。もっとも、『三国伝記』（版本）でも「万戸連リ開キ麒麟鸞鳳相対セリ。虹の梁金ノ鐺日月光ヲ散ジテ樓閣互ニ映徹シ、玉ノ砂銀ノ床万花影浮テ千闥品ナ々分タリ」と同じように表現がみられるので、共通したもとの典拠があったとも考えられる。

三　阿房宮の規模

『咸陽宮』絵巻の第一系統とした三本は、大きく括れば共通した要素が認められるとはいえ、すでに咸陽宮の描写の方法を見ただけでもかなり違いがあり、それぞれ独自の説話の世界を持っていることが知られるであろう。右の長生殿不老門でも、穂久邇本・専修寺本には記述がなく、青山短大本と第二系統の二松学舎本には存し、部分的には重なりながらも、また資料の違いも明らかで、これは内裏の高さに関しても同じ結果であった。

すでに述べたように、咸陽城は渭北から渭南の地へと拡張され、その宮殿の前殿として建築されたのが阿房宮だったが、『三輔黄図』[8]によると本来は秦恵文王の阿城を始皇帝が増築したのだという。さらに、「規恢三百余里、離宮別館、弥山跨谷、輦道相属、閣道通酈山八十余里、表南山之顛以為闕、絡樊川以為池、作阿房前殿、東西五十歩、南北五十丈、上可坐万人、下建五丈旗、以木蘭為梁、以磁石為門、周馳為複道、度渭属之咸陽、以為象太極閣道、抵営室也云々」と、三百里隔たった離宮として位置づけられ、山を覆い、谷を跨いで輦道がつらなり、酈山（今日の始皇帝の酈山陵）へ通じる八十里の道を設け、南山の頂上は宮門とし、樊川は池として用いたという壮大さであった。その建物たるや、東西五十歩（『史記』は五百歩とする）、南北五十丈、上には一万人が座れる広さ、床下は五丈の旗が立てられるだけの高さがあり、木蘭（木蓮）の梁、磁石の門を構え、上下二段となった廊下を巡らし、渭水を渡って咸陽へと通じるようにしたのは、北極星が閣道づたいに天の川を渡って営室星に至ったのを象ったのだという。なお、磁石の門というのは、武具を帯びて入るのを防ぐためだったようで、これは絵巻での「殿上に兵仗を帯して登ること、常に法度なりければ」（青山短大本）とするのと関連してくるであろう。『史記』の記述と部分的に異なりはするが、全体の構造としては基本的に一致しているであろう。

表でも明らかなように、絵巻の阿房宮は諸本いずれも延慶本と異なる描写をしているのだが、といっても相互に共通した内容を持っているわけでないことは、これまでと同じである。まず、もっとも他の本文と異なる二松学舎本を引用すると、

宮殿のかずおほき中に、阿房殿と申すは、始皇つねに出御なりて、政事おこなひ給ふところの殿也。東西へ九町、なんぼくへ五町、其たかさ三十六丈なり。上にはるりのかはらをふきて、えんわうつねにここにすむかとあやしまる。鳳のいらか空にかけりて、きうせうのがくをまつにこたる。虹のうつばり空にかかりて、晴天の日かげにかがやき、めなうの戸ぼそにはしやこのみすをかけ、しんじゆのようらくをたれ、こはくのらんかんには白ごんのこじりをみがき、さんごのたるき、すいしやうのかべ、たいまいのかき、にしきのしとね、にはには四季のけいをうつし、池にはげきしゆの舟をうかべ、玉のいさごえいてつ

し、花とはなとはいろをあらそひ、えだと枝とはひかりをあはせ、りんほうつらなり、花葉しける、かいだつぎよくしや、しなじなにわかれたり。

と、数多い宮殿のうちでも、始皇帝がもっぱら出御して政治を執ったのは阿房殿であるとし、ついでその規模として東西九町、南北五町、高さは三十六丈だとする。これは、延慶本の「其ノ中カニ阿房殿トテ、始皇ノ、ツネハ行幸成テ」とする表現を思わさせ、東西・南北をともに正方形の「九丁」とするのとは異なりはするが、『源平盛衰記』に「東西へ九町、南北へ五町、高さ三十六丈なり」とあり、『三国伝記』（平仮名本）に「東西九町南北五町、高さ三十六丈也」、謡曲に「銅の柱三十六丈。東西九町、南北五町」などともするように、むしろ本来は二松学舎本の寸法の方が正当なのであろう。単位はそれぞれ違いがあるとはいえ、青山短大本が「東西五百歩、南北へ三百歩、高さ三十丈なり。大床の下には五ちやうの旗鉾を立て並べ」とし、穂久邇本が「東西五百けん、南北は五十丈」、専修寺本が「東西五百けん、南北五町、高さ二十ちやう」とするのと明らかに対立しており、『史記』に記される「東西五百歩、南北五十丈……下可以建五丈旗」とするのに近い数値を継承する。

後者の絵巻の三本がいずれも東西を「五百」とするのでは共通するものの、南北の長さになると「三百歩」「五十丈」「五町」と、建物の高さとともに違いが生じる。穂久本は『史記』と、専修寺本は二松学舎本と数値としては共通しており、青山短大本もまったくの錯誤などではなく、『文選』（第三）に「阿房殿、東西三里、南北三百歩、下立五丈旗」とある説と関係するのであろうか。ここで「三里」とするのは、内裏の高さとの混乱によるとも考えられるが、『史記評林』にも「東西三里、南北五百歩」とあるので、このような解釈の存在も想定できそうであるし、また「南北五百歩」は「東西」の誤伝とも見なしうるなど、一つ一つ見ていくとまったく複雑にからまっていることが知られる。阿房宮の規模一つを取り上げただけでも、絵巻では相互の書写とか、影響などといった関連性はあまり認められなく、それぞれが独自の世界を持っているようである。

二松学舎本の考察に戻ると、阿房殿は三十六丈の高さがあり、屋根は瑠璃の瓦を葺き、「鴛鴦が常に住むかと怪しまる」とする飾りが置かれ、鳳の甍が並び、虹のごとくにかがやく梁が天井を支え、瑪瑙の戸にはシャコ（貝の一種）の御簾を掛け、真珠の瓔珞を垂れ、琥珀の蘭干には白銀の鐺、珊瑚の垂木、水晶の壁、タイマイの垣、錦の褥には四季の景を映し、池には鷁首の舟を浮かべ、玉の砂と映徹し、花や枝はそれぞれの色を競いまた照り映え、などとその華麗な殿舎の姿が長々と記述される。阿房宮をこのように描写する資料はなく、御伽草子を思わせるスタイルからすると、[9]各種の作品から常套的なことばを集めるなどして合成したのかも知れない。延慶本の「上ハ瑠璃ノ瓦ヲ以テ葺キ、下タハ金銀ヲ瑩ケリ」とするのとかろうじて重なるにすぎないが、ただすでに引用したように、『太平記』には阿房殿ではなく三里を九重に築いた内裏に建てられた御殿の描写として、「麒麟列鳳凰相対ヘリ。虹ノ梁金の鐺」「日月光ヲ放テ樓閣互ニ映徹シ」「花柳影ヲ浮テ、階闥品々ニ分レタリ」などとあり、とくに傍線を引いた語句の一致は無関係ではないであろう。すると、両者の共通する資料が存在し、『太平記』ではそれを内裏の表現に用い、二松学舎本では阿房宮に取り込んだとも考えられる。

これまでいくつかの特徴について比較してきたように、二松学舎

本は絵巻の諸本の中では、『平家物語』や『太平記』などに収載される、いわゆる〈中世史記〉と称される説に比較的近く、それと距離的にやや遠い位置にあるのが残りの三本という構図になることは、これまでもくりかえし述べてきたところである。後の三本のうち、青山短大本は、阿房殿の規模を記した後、金銀、瑠璃、真珠の砂がそれぞれ十万石庭に敷かれていたとしていたが、これは延慶本などに指摘されていた内裏での描写であったはずで、二松学舎本でも長生殿の後に「しんじゆのいさごをしき、白るりの玉をならべ」とあって、明らかに対立する。すると、青山短大本の阿房宮の描写は、延慶本よりもむしろ永済本系統の具体的に「十万斛」を撒いたとする資料に依拠し、説話の世界とは隔たりはするものの、その荘厳化に用いたのであろう。

専修寺本になると、阿房宮から渭水を越えて禁門までの三百里、その間は廊閣によって結ばれていたと、『史記』の記述と基本的な構造は重なる一方では、殿舎は玉の甍、金の梁、銀の垂木、銅の柱であったなどとするのは、方法としては二松学舎本に近い描写をとる。このように広く流布した多様な咸陽宮説話とそれほど密接な関係にはないのが、初めに示した穂久邇本のようで、増殖する以前の姿をいくらかとどめているのではないかと思う。もちろんこれは比較の問題にすぎなく、しかも咸陽宮という描写に限ってのことなので一概に断じてしまうことはできないが、全体的なおおよその傾向としてはそれほど誤ってはいないだろう。最後の蓬莱山へ不老不死の薬を求めて船出する徐福譚にしても、専修寺本と青山短大本には存在しながら、穂久邇本には欠けているのも同一線上で解釈できるように思う。今後は、このように一つ一つの説話の背景について諸本での摂取の方法を考察することによって、さらに絵巻の性格を明らかにしていきたい。

注

(1) 拙稿「『咸陽宮絵巻』の諸本とその性格」(『国語と国文学』平成四年四月号)。ここでは、第一系統(穂久邇本・専修寺本・青山短大本)と第二系統(二松学舎大本・スペンサーコレクション本・信多本)とし、それぞれの本文の性格や内容について触れた。

(2) 穂久邇文庫本(二巻)は天地三三・七センチ、表紙は紺紙に金泥による雲霞、松木描、それに金切箔散らし、題簽は「かんやう宮上(下)」とする。料紙は斐紙、それに金泥で各種の草木などを描き、各巻末に「城殿」とする壺印と、「城殿和泉掾/草子屋/藤原尊重」とする方形印が捺される。読みやすくするため、私に濁点や句読点を付した。以下の他本についても同じである。

(3) 咸陽城の形成過程や規模については、池田雄一「咸陽城と漢長安城」(『中央大学文学部紀要』史学科第二〇号)による。

(4) 貝塚茂樹「中国のあけぼの」(一九九九年刊、河出書房新社)

(5) 専修寺本については、本誌に全文を翻刻した。

(6) 注(3)の引用によると、この発掘報告には王仲殊「漢長安城考古工作的初歩収穫」がある由だが、未見。

(7) 黒田彰「咸陽宮覚書」(『中世説話の文学史的環境』所収、昭和六二年刊、和泉書院)には、長城から城の周囲へ転じたこと、雁門のことなど諸説を例示して考察する。

(8) 注(3)引用本文による。

(9) 『梵天国』には「その内に、きりの柱、瑪瑙の石、七宝荘厳りすべて、極楽世界を音に聞きしに違はず。歩み入りて御覧ずれば、玉の階玉の床、玉の臺、玉の簾あり云々。」とあり、『蛤の草紙』には「雲に聳えて門あり。見れば瑪瑙の礎に、水晶の珠を柱とし、瑠璃のるき云々」などと、諸作品に類似の表現を見いだす。

付記—『咸陽宮』絵巻諸本の調査は、懐徳堂研究助成金の補助による成果の一部である。

—本学助教授—